

(要約版)

## 帝政ロシアにおける茶貿易の発展とモスクワの商人

助成研究者 左近幸村 (新潟大学研究推進機構超域学術院)

### 1. 目的

本研究の目的は、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのロシアにおける茶貿易の発展を、「国内市場」の在り方、つまりロシア国内における流通経路や茶の等級、どのような地域で消費されたかといった問題を中心に見ていくことである。

ロシアでは18世紀末から茶が普及し、19世紀末には関税収入の稼ぎ頭となった。現在もヨーロッパで最も茶の消費量の多い国となっている。しかし一般向けの読み物としてはともかく、経済史の観点からロシアにおける茶の歴史を研究した例は、これまでそれほど多くなかった。帝政期の茶貿易については近年になって、ロシアのイワン・ソコロフが精力的に本を刊行しており、詳細な彼の研究には教えられることも多いものの、個々のトピックに関する考察は浅く、何かを立証しようとするよりは茶の資料集もしくは百科事典的な本となっている。

日本では吉田金一の研究がつとに知られており、最近では森永貴子が研究を進めているが、主たる関心がキャフタにあるため、キャフタが露中貿易の独占的な地位を失う19世紀半ば以降の茶貿易については、言及が乏しい。

そこで筆者は以前、19世紀後半からロシア革命期までのロシアがアジアからどのように茶を輸入したのかを、航路網の発達との関連から研究した。ただし拙稿では、茶を通じたロシアとアジアの結びつきは描けたものの、大量の茶の輸入を喚起したロシアの国内の消費の動向については、磚茶がシベリア、紅茶がヨーロッパ部、緑茶が中央アジアで主に消費されていたということを除くと、ほとんど言及できなかった。また、流通において商社が果たした役割もほとんど明らかに出来ていない。本研究は、モスクワを中心とした茶の流通形態がどのように変化していったかを、19世紀半ばから20世紀を中心に、一次史料に基づき明らかにしようとするものである。

### 2. 方法

本研究の対象であるモスクワの茶の商社に関する史料は、主にモスクワ中央歴史文書館に所蔵されている。2016年9月にモスクワへ出張し、同文書館と国立図書館で史料収集を行った。文書館では20世紀初頭にロシアを代表する茶の商社の一つであった、「グブキンの後継者クズネツォフ」社(以下、クズネツォフ社)のバランスシートや各地の工場の状況を記した史料などを収集した。またモスクワにある国立図書館では、クズネツォフ社の創業25周年を記念した1916年刊の社史を入手することができた。

さらに 2017 年 3 月にはペテルブルグへ出張し、ロシア国立歴史文書館で茶の輸送料に関する史料を入手することができた。またロシアの電子図書館がオープンし（正確な開館時期は不明だが、おそらく 2016 年）、日本からも帝政期のロシア語史料の入手が容易になった。

当時のロシアでは、茶の取引や税制に関する議論が活発に行われており、出版物も多く出ていた。物価に関する統計資料もある程度残っている。いくつかの代表的な商社は社史を刊行している。それらを通じて茶のロシア国内市場がどのようなものであったかを知ることができる。

以上の一次史料に加え、ソコロフらの先行研究も参照しつつ、19 世紀から第一次世界大戦期までのロシア国内において茶がどのように取引されていたのかを論じた。

### 3. 結果

茶がロシア社会に普及し始めた 18 世紀末から 20 世紀初頭にかけての物価の変動を見ると、ほぼ 2 倍になっている。キャフタの独占が崩れる 19 世紀半ばから考えても、20 世紀初頭の物価はほぼ 1.5 倍になったと考えられる。1860 年代から第一次世界大戦が始まるまで、一見茶の価格はそれほど大きく変わっていないように見えるかもしれないが、物価全体の変動を考えると、茶の実質の価格は 19 世紀後半も低下し、より下層の人々に手が届きやすくなった。

その理由として、航路網や鉄道網が発達し、中国やインド、セイロンから効率的に茶をモスクワまで運べるようになったことや、値札より低い価格で売ることが定着するような、激しい競争が商社の間で行われたということが考えられる。同時に、茶の産地や質などの情報を取引相手に明示するなど、取引方法が洗練されていった。また流通経路が変わったことで、茶の集積地だったニジニ・ノヴゴロド定期市が衰退していった。商社の入れ替わりも激しく、第一次世界大戦直前にロシアの二大茶商となっていたクズネツォフ社とヴィソツキー社は、いずれも世紀転換期に急成長した新参加者だった。前者の市場であったウラル山脈沿いや、後者の市場であったウクライナは新興工業地帯であり、工業化が進展し労働者にも茶が浸透するという時代の波にうまく乗って成長したのが、クズネツォフ社とヴィソツキー社だった。

一方、ロシア社会における茶の普及を反映して、第一次世界大戦が始まる頃には、茶を国の専売制にして、財源にしようとする案もあった。もちろん反対意見も根強く、1915 年はペトログラードの商人たちは、専売制にするよりこれまで通りの取引を維持して、税収を増やした方が良いと述べるための論拠として、資料集を作成している。この論争の行方は追えていないが、激しい販売競争が行われる一方で、市場として発展すると国家による専売案が出てくるといえるのは興味深く、今後茶の問題を通じて、ロシアにおける国家と市場の関係を考察してみたい。